

## 俳句 大津俳句会

神木が留守をあづかる神の旅

井芹眞一郎

一夜にて冬めく朝になりにけり

相原 朋子

秋蝶と風にのり 青い森ゆく

矢嶋 道子

風の愚痴まどう枯葉の裏表

上杉 波

星月夜 借景にして天守閣

一上日登美

診療の対話おだやか秋の朝

塚本 洋子

夕映への染め上げてゆく紅葉山

岡崎 浩子

火の奥に昭和見えたり彼岸花

榮田しのぶ

天高し飛行機小さく吸ひ込まる

佐賀 久子

里山の神社に土俵鶏頭花

村田 健二

小春日や飛んでは跳ねるきりんの子

佐澤 俊子

貼替える障子みやくみやく令和の世

志賀 孝子

朝日差し金木犀の香こぼれ

香月のり子

## 俳句 つのはな句会

レモンたわわ 忘れ上手な母の勝ち

新米はすしりと重しこの朝の

一本のシオンの花の爽やかさ  
薄紫に朝の風吹く

指導 阿木津 英

豊岡ミツル

友より届きし宅急便は  
わが猫は前肢に顔覆いつつ  
眠れり毬の如くになりて

小平 善行

梅木トキエ

吉永 恵子

山狹の道は林の木の間より  
秋の空見ゆひときわ青し

坂本 果子

ソプラニスタの澄みたる声に

鞍 岳志

斎場に流るるは荒城の月の歌  
ソプラニスタの澄みたる声に

坂本 果子

真向いに越して来たりしその顔も  
知らぬまま一年が過ぐ

吉永 恵子

草刈りをするわが周り飛び交いて  
ありしがいづこ精霊蜻蛉は

吉永 恵子

吉田 良子

吉田 良子

咲きかけのさざんか一枝折る  
吾にこぼるる露のヒンヤリとして

吉田 良子

えんぴつと眼鏡とノート揃え置き  
雑誌『歌壇』をわが読み始む

本田 貴子

花は摘めさなくば来年咲かざると  
言えども夏の黄のバラを愛づ

本田 玲子

## 短歌 大津短歌会・野づかさ

指導 阿木津 英

## 短歌

一本のシオンの花の爽やかさ  
薄紫に朝の風吹く

大津短歌会・野づかさ